

2023年に旅立たれた名演奏家を聴く

プログラム

2023年も残り一ヶ月を切りました。振り返ってみますと、新型コロナの影響でコンサート需要が大幅に少なくなっていた昨年までと比べ、従来の活況を取り戻した感がある一方、多くの名演奏家の訃報が相次ぐ一年であったような気がします。今日は今年旅立たれた名演奏家の演奏を聴きながら故人を偲びたいと思います。

前半はアメリカの名ピアノ三重奏団、ボザール・トリオのピアニストとして半世紀に亘って活躍、解散後はソロピアニストとして高い評価を得たメナヘム・プレスラー（1923.12.16～2023.5.6）の弾くショパン。ウィーン生まれで、モーツァルト弾きとして実力と人気を兼ね備えた名ピアニストイングリット・ヘブラー（1926.6.20～2023.5.14）の弾くモーツァルトの協奏曲。後半は、わが国を代表する二人の名指揮者、作曲家でありN響の正指揮者をはじめ、数々の日本のオーケストラの発展に貢献、晩年は大阪交響楽団と精力的に録音を続け、衰えを見せなかった外山雄三（1931.5.10～2023.7.11）と、古くからバイロイト音楽祭で助手を勤め、日本でも多くのオペラを指揮、特にワーグナー演奏に定評があった飯森泰次郎（1940.9.30～2023.8.15）の指揮するワーグナーをお聴き頂き、最後は長きに亘りサンクトペテルブルク・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督を勤め、読響への客演でもおなじみだったロシアの名匠ユーリ・テミルカーノフ（1938.12.10～2023.11.2）の指揮する二曲の「ロメオとジュリエット」をお聴きください。（中川）

フレデリック・ショパン（1810～1849）：

**マズルカ第25番短調Op.33-4 / マズルカ第38番嬰ハ短調Op.59-3
夜想曲嬰ハ短調（遺作）**

メナヘム・プレスラー（ピアノ）
（2017.10.16 サントリーホールでのLive）

ヴォルフガング・アマテウス・モーツァルト（1756～1791）：

ピアノ協奏曲第27番変ロ長調K.595

イングリット・ヘブラー（ピアノ）／クラウス・ペーター・フロール指揮NHK交響楽団
（1996.11.1 NHKホールでのLive）

*** 休憩 ***

外山雄三（1931～2023）：

管弦楽のためのティヴェルティメント～第2楽章アンダンテ

外山雄三指揮オーケストラ・アンサンブル金沢
（2006.7.16 石川県立音楽堂でのLive ～岩城宏之追悼コンサートより～）

ジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）：

歌劇“運命の力”序曲

外山雄三指揮読売日本交響楽団
（2018.1.31 東京オペラシティ・コンサートホールでのLive）

リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）：

歌劇“タンホイザー”序曲

飯守泰次郎指揮読売日本交響楽団
（2017.7.7 東京芸術劇場でのLive）

ピョートル・チャイコフスキー（1840～1893）：

幻想序曲“ロメオとジュリエット”

ユーリ・テミルカーノフ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（1985.9.17 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）：

舞踊組曲“ロメオとジュリエット”Op.64～タイボルトの死

ユーリ・テミルカーノフ指揮サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団
（1992.11.8 ウィーン・ミュージクフェラインサールでのLive）

演奏家と一部曲目解説

メナヘム・プレスラー (1923.12.16~2023.5.6)

1923年、ドイツのザクセン=アンハルト州、マクデブルク生まれ。1939年、ナチスから逃れて家族と共にイスラエルへ移住し音楽教育を受けました。1946年、サンフランシスコのドビュッシー国際コンクールで優勝、すぐにオーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団と共演しアメリカデビューを果たすと、アメリカはもとよりヨーロッパ各地の演奏会に登場、成功を収めました。1955年、ボツァール・トリオを結成すると世界屈指の室内アンサンブルとして君臨、ピアノ三重奏曲の人気を高めた功績は計り知れません。2008年8月21日、デビューした時と同じタンブルウッドで最後の演奏を行ない解散、53年に及ぶ歴史に終止符を打ちました。その後はソロ活動に専念、晩年は欧米で話題の中心となり、日本へも2011年、2017年にリサイタルを開き、味わい深い演奏を披露しました。

ショパンの「マズルカ」はポーランドの民族舞曲のひとつで、**第25番**は1838年、**第38番**は1845年に完成、共にマズルカの中では最も親しまれている作品です。**夜奏曲嬰ハ短調**は1830年20歳の時作曲された青年期の作品で、中間部ではピアノ協奏曲第2番の旋律を借用、主旋律の美しさも絶品で、今日最も演奏頻度の高い名曲のひとつです。

イングリット・ヘブラー (1929.6.20~2023.5.14)

1929年、オーストリアのウィーン生まれ。両親の都合で10歳までポーランドに住み、ピアノを学び始めました。第二次世界大戦勃発とともにサルツブルクへ移住し、モーツァルトウム音楽院に入学、ハインツ・シヨルツに学び、1949年卒業後、ウィーン音楽アカデミーでパウル・ヴァインガルテンに師事、その後ジュネーヴ音楽院でニキタ・マガロフ、パリでマルグリット・ロンに教えを受け、多様な音楽性を身に付けました。1952年と1953年のジュネーヴ国際コンクールで第2位、1954年のミュンヘン国際コンクール、ウィーン・シューベルト・コンクールで第1位となり、その年のサルツブルク音楽祭でモーツァルトのピアノ協奏曲第12番を演奏してデビュー。好評を博して国際的な演奏活動を開始しました。ウィーン古典派、シューベルト、シューマン、ショパン等のロマン派、ドビュッシーに至るレパートリーを持っていましたが、“モーツァルト弾き”と呼ばれるほど生涯モーツァルトを演奏し続けたピアニストは稀でした。テンポ感の良さや自然に流れ出る響きの美しさは気品があり、極上のモーツァルトを聴かせてくれました。1966年の初来日以降頻りに日本を訪れ、親しまれた名ピアニストでした。

モーツァルトのピアノ協奏曲第27番変ロ長調は1791年死の年に書かれた最後の器楽曲で、3月4日、宮廷料理人イグナツ・ヤーン邸で行なわれた初演がモーツァルト最後のステージとなりました。

外山雄三 (1931.5.10~2023.7.11)

1931年、東京生まれ。東京芸術大学で作曲を学び、在学中コンクールに入賞。卒業後、N響指揮研究員を経て1956年9月N響を指揮してデビュー後、1958年から1960年にウィーンに留学し、1960年N響世界一周旅行の指揮者として同行、各国でアンコール用に作曲した自作の「管弦楽のためのラプソディ」を発表し、今日外山雄三の代表作として知られています。N響からは1979年正指揮者の称号を授与されましたが、これまで、京都市交響楽団(1967~1971)、名古屋フィル(1981~1987)、仙台フィル(1989~2005)、神奈川フィル(1992~1996)の音楽監督を歴任。2016年3月からは大阪交響楽団のミュージック・アドバイザーに就任、2020年には名誉指揮者となり、ベートーヴェン、ブラームスの交響曲全集、チャイコフスキーの後期交響曲等を録音、晩年に到達した芸格を披露しました。日本国内のオーケストラを数多く指揮し、その育成に尽力、オーケストラ界の底上げに大きな足跡を残しました。

管弦楽のためのティヴェルティメントは作曲家外山雄三が1962年、岩城宏之の依頼によって作曲、岩城宏之指揮ブラハ交響楽団によって初演されました。3楽章構成で、各楽章に日本民謡が引用されていますが、第2楽章は宮崎県の「ひねつき節」が使われています。

飯森泰次郎 (1940.9.30~2023.8.15)

1940年、裁判官であった父の赴任先、旧満州で生まれました。桐朋学園大学で指揮者を志し、斉藤秀雄に師事、在学中の1961年7月藤原歌劇団公演のブッチーニの「修道女アンジェリカ」を指揮してデビュー。卒業後1962年アメリカへ留学、1966年ミトロプーロス指揮者コンクール、1969年カラヤン指揮者コンクールでそれぞれ第4位入賞。その後ヨーロッパに渡り、1970年から約20年間バイロイト音楽祭の音楽助手を務め、本場のワーグナーのオペラ上演を経験しました。また、マンハイム、レーゲンスブルクなど各地の歌劇場で活動。日本では読売日本交響楽団(1972~1976)、名古屋フィル(1993~1998)、東京シティ・フィル(1997~2011、2012から桂冠名誉指揮者)、関西フィル(2001~2010、2011から桂冠名誉指揮者)、仙台フィル(2018~2023)の常任指揮者を歴任。2014年からは新国立劇場の芸術監督に就任しました。東京シティ・フィルとは2000年から4年にわたって「ニーベルングの指輪」全四部作をはじめワーグナーの楽劇を演奏、日本のワーグナー演奏史に大きな足跡を残しました。

ユーリ・テミルカーノフ (1938.12.10~2023.11.2)

1938年、ロシア、コーカサス地方ナルチク生まれ。13歳の時レニングラードに移住。1957年から7年間レニングラード音楽院で指揮を学び、その後、名教師イリヤ・ムーシンの研究生となりました。1965年ミハイロフスキー劇場でヴェルディの「椿姫」を指揮してデビュー。1968年全ソ指揮者コンクールに優勝。これまでサンクトペテルブルク(レニングラード)交響楽団(1968~1976)の首席指揮者、マリインスキー(キーロフ)劇場(1977~1988)の首席指揮者・芸術監督、1988年から亡くなるまで、ムラヴィンスキーの後を継いでサンクトペテルブルク(レニングラード)・フィルハーモニー交響楽団の首席指揮者兼音楽監督の地位にありました。一方で西欧やアメリカにも客演が多く、1979年から首席客演指揮者となったロイヤル・フィルとは1992年に首席指揮者となり、1997年以降は桂冠指揮者となりました。他にボルティモア交響楽団(1998~2006)の音楽監督、日本では読売日本交響楽団に2000年初登場以来共演を重ね2015年名誉指揮者になっています。テミルカーノフは解放的で豪快な鳴らし方や重厚な表現など、ロシアの指揮者の特徴は持っていましたが、それと同時に、来日公演で聴かせた驚くほどの見事なアンサンブルを例にとっても分かるように、バランス感覚に優れ、洗練されたセンスも持ち合わせている名指揮者でした。